
タラスクス～朝の病名～？

鳥海きりう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タラスクス〜朝の病名〜？

【Nコード】

N 8 7 7 3 P

【作者名】

鳥海きりう

【あらすじ】

遙か未来かも知れないし、遠い過去かもしれない世界。突如人類に反旗を翻し、世界を滅ぼし、最愛の母を殺した《竜》を滅ぼすため、神耶朝は人類側に残された最後の竜機兵・タラスクスで戦いを挑む。次々と竜を打ち倒し、終戦まで戦い抜いた朝は姿は17歳のまま、聖ドレイク連合の聖王守護騎士団次席に登り詰めていた。しかし未だ竜は絶滅したわけではなく、朝はなおも戦い続ける。しかしその心は、《ある病》に蝕まれていた。

？ ・もしあなたが「あと一步なのにうまくいかない」と感じたら

十

「神様つて、本当にいるの？」

「……いないわよ」

昔、そんな会話をしたことがある。

私以外にも、憶えがある人はいると思う。そして、その問いに対する答えもだいたい同じだったと思う。今の時代の人達は、だいたいは自分の目に映った物しか信じない。

もし、その人達の言うことが正しいとしたら。

私は、毀れている。

？　もしあなたが「あと一步なのにうまくいかない」と感じたら

聖ドレイク連合王国は、神聖なる力を持った王とそれに付き従う七人の騎士によって統一され、建国された　という伝承を持つ国である。その国土は広大で、豊かな緑と水に恵まれ、人は誰も王の如き寛大さと騎士の如き誇りを持ち、聖王の治める親政府を護るように七人の騎士の領地が配され、さらにその周りでは険しい山脈が、敵や天変地異の侵略からこの国を護っている。

ただ　一つ言うとするならば、神聖なるこの国の王が信奉しているのは、神ではない。
『竜』だ。

+

私は、毀れている。

「陛下　ご決断を」

「うん　」

そう思い始めたのは何時の頃からだろう。どこかでおかしいと感じた。最初はただ、皆と違うだけだった。でもだんだん、違うのはおかしいことなんじゃないかと思うようになった。どうして皆と一

緒じゃないんだろう。

どうして皆と同じにできないんだろう 「神弥」

「神弥朝《かみやあした》」

「……！」

びつくりした。いや、呼ばれたのがその理由じゃない。呼ばれるのはわかっていた。どうせ私だ。そのために延命処理までされたのだから。

全ての女が求める永遠の若さと美 羨ましい？ 代わってあげようか？ あーはいはい態度が悪かったね。いいだろう。感謝してやるよ。その代わりお前らも私に感謝しろ。そのバカ陛下じゃなくて私に向かって跪き、地面に額をこすりつけて感謝の祈りと賛美歌を百遍唱えろ。

あの地獄のような戦争から百年近く経った今でも、私はあの頃と同じ、勇気と力に満ち溢れた と周囲には見えていたらしい 十七歳のままだ。

「え、えーと」

「神弥卿。起立」

「……」

隣からこそつと言われ、私は即座に 決して慌てているように見えないように 立ち上がり、直立不動の姿勢をとる。

「えーと、はい、何なりと。陛下」

「ウオラギネはこう申しておるが、朕は卿の意見も聞いておきたい」
「は」

「陛下。もう議論は出尽くしております。後は陛下のご判断を仰ぐのみ。今さら神弥卿の意見など いや、もちろん不要とは申しませんが、この御前騎士会議の場において今の今まで発言されなかったわけですから」

「特に意見は無い つまりは、この議題にさして興味が無い、と取られても」

先に言ったのが宰相のウオラギネ、後から余計な口を挟んだのが

七騎士の一人、マルガリタだ。皆、この二人の顔と名前は憶えなくていいよ。脳が腐るから。

「別に、そういうわけじゃ」

「神弥卿は我ら七騎士の中でも武門の筆頭。議題が議題だけに、遠慮なされたのでしょうか」

と、言い返そうとする私にかぶせてきたのは隣に座る騎士の一人、レギン。こいつの顔は 覚えたい人は覚えてもいいよ。どうせこの後も出てくるだろうから。

「我ら七騎士はいずれも陛下を守る剣として、己の騎士団を所有しておる。自分だけが武門だから発言しないというのは理由にならないじゃろ」

「そもそも神弥卿は常日頃からこの騎士会議を軽視しておられるように見受けられます。前回と前々回は確か欠席されましたね？」

「ふざけた話だ。陛下に尽くす礼はあっても、我らの分は無いというのか」

最初に言い出したのが私に次いで古参の騎士でヤノシュ卿。次に言ったのが私とマルガリタと同じ女騎士でラトスク卿。で、その次が ああもう面倒くさい。なんで私がこんな連中の紹介までしなきゃいけないわけ。もういい。やめた。

「控えよ」

意外なところから助けが降ってきた。「勇敢なる騎士の諸君。朕は神弥卿に意見を求めたのだ。他の卿に発言を求め、また許可した覚えは無い」

場が静まり返る。「…そうであるな、ウオラギネ？」「は。

確かに議事録には、陛下のそのようなご発言はありません」

「うん。神弥卿」

「…はい」

「何か意見があれば」

少し考えて、答えた。

「折角陛下に頂いた機会ですが、やはり私は武門の、それも生まれ

てからずっと最前線で敵と斬り合うことしかしてこなかった不精者です。他の皆様がすでに議論を尽くされたのなら、私はそれに従います」

ああ、言ってしまった。

もしかして、私にこれを言わせるための大いなる陰謀だったのだろうか。「陛下。本人もこう申しておりますし」「うん。では」

「決を取ろう。今年のザハク復活祭実行委員を神弥卿に任ずる。異議のある者は起立せよ」

誰も立たなかった。

「神弥卿。貴公はもう着席してよい」

「はい」

バカ陛下め。「前年に引き続きの大役であるが、卿ならば完遂できるものと信じる。提案や要望があれば、ウォルギネに相談するよ
うに」

「はい、陛下」

ああもう面倒くさい。だったら宰相殿が一人でやればいいじゃないか。あいつの方が勝手がわかってるんだから。

でも、そうはいかない。実行委員が騎士の中から選ばれるのは理由があるし、その役目は確かにウォルギネ宰相には逆立ちした
って不可能だ。

「では、他に取り上げるべき案件が無ければ、以上で御前騎士会議を終了する。ご苦労であつた」

ウォルギネが宣言し、陛下の席に御簾が下がり、騎士は起立して最敬礼でそれを見送る。

陛下が退席し、それで場はお開きになった。私はマントを掴んで肩に巻きつけ、さっさと議場に背を向ける。

衝撃音。

「!？」

突如響いた音に全員が動きを止め、騎士の数人は瞬時に剣に手をかける。

「す、すみません！ 遅れましたあ！」

扉を勢いよく開けて入ってきたのは、この場には全く場違いなあどけない顔立ちの少女だった。ただし少女は私と同じようにマントを羽織り、帯剣している。「あ、あれ…？ 御前会議、は？」

「もう終わったわよ。バカ」

言いながら、私は少女の傍らを通り過ぎる。いつものことだ。他の騎士達も呆れながら、剣にかけた手を離す。

少女は私の言葉が聞こえてないのかこの状況を理解してないのか、通り過ぎる私に全力のスマイルを放ってくる。

「あ、アシタ姉さま！ おはようございます！」

「おそようございます」

「で、でも私、十分しか遅刻してないですよ？」

「議題が一個しかないんだから十分あれば終わるわよ。バーカバカ」

「あ！ 先輩！ どちらへ？」

「帰る帰る」

答えながら、少女の開けた扉をくぐる。「あ、待ってください姉さま！ お供します！」

「クララ卿！ その前に少しよろしいか！？」

「あつ……はい、宰相殿」

「…」

さあ皆さん一緒に。

「バーカバーカ」

十

それだけで実は私の城より広いんじゃないかという聖ドレイク執政官前庭園を抜け、軽く汗をかきながら、聖門前まで辿り着いた。会議が十分しか掛からなかったので、時刻はまだ正午前。しかし私は基本朝食は食べない人なので、そろそろ本格的にお腹が空いてく

る。

「……？」

守衛に話して開けさせようと門に近づいた時、その守衛が門を挟んで誰かと言いつ合っているのが見えた。「どうしたの？ ゲド」

「あ？ おお、これは神弥卿！」

かなり熱心に　　とうかキレ気味に相手と話していた守衛のゲドは、声をかけたのが私だと気づいてびっくりしながら振り返る。

「御前会議は、もうお済で？」「済んでなかったら反逆罪よ。どしたの？」

「いや、この者がもう長いことこの聖門前で突っ立っておりまして。ここは恐れ多くも聖王宮の門前だから用が無いなら移動しろと言いましたら、待ち合わせだから動けないなどと」

「近頃は面白いバカが多いわね。聖門前を待ち合わせに使うなんて下手すりや国王侮辱罪よ。どれ、どんなバカか私にも面を見せてちょよ」

ゲドが話していた相手を覗き込み　　固まる。「よう、朝」

「あ　あんた！」

私は思わず身を乗り出し、聖製銀で造られた門の格子を掴む。「

か、神弥卿！？」「城には来るなって言っただでしょ！？」

「悪いな、長いこと歩かせて。本当は宮の前まで行って出迎えたかったんだが、このおっさんが通してくれなくてな」

「来なくていい！　一体何の用！？」

「もちろん、仕事だ。それも急ぎのな」

「……！」

「早く出て来い。それとも、俺がコイツをぶちのめしてそっちに行こうか？」

「な、何だとこのガキ！」

「……ゲド」

私は諦めて、ゲドに声をかける。「私帰るから、ここ開けて」

「神弥卿　この男は何者なんです？」

「ええと……なんだろう、小間使いよ。口悪いけど」
「……」

私の嘘に納得したのかしなかったのか、ゲドは無言で門を開けた。
「ごめんね」「…お勤め、ご苦労様です」ゲドはいい人だ。今日の事はもう二度と訊かないし、他の誰にも言わないだろう。

だからこそ、真実を教えられないのが、申し訳無い。「…小間使い、だ？」

「うっさい死ね」

「口が悪いのは手前だろうが」

「お願いだからもうその腹の立つ声で喋らないで。お腹が空いてるの」

「ケツアルコアトルの所在が分かった」

それまでの怒りと苛立ちが、一瞬で吹き飛んだ。「…何って？」

「ケツアルコアトルだ。翼持つ蛇。髭と杖の翁。天地の創造主。全てのヒトの父。食物の神。学術と工芸の守人。農耕と科学の守護者風の王」

言葉を切り、隣を歩く私を振り返る。「そして、お前をこの地獄に突き落した悪魔」

「……」

「殺りたくないなら、先方には俺から断っておくが」

「やるわよ」

「無理すんな」

胸倉を掴む。「やらせろ！これ以上あんたと話す気は無い！

奴の居場所を言いなさい！」

「落ち着け。俺はマジで言ってるんだ。余程殺したいだろう。確実に、欠片も残さず、復活できるとしてもしたくなくなるほどにボロボロに痛めつけて、消炭にしてやりたいだろう」

「当然！」

「だが、本当にできるか？相手は超A級の竜機兵だ。お前だって

そんな相手とは何度も戦ってないだろうし、あつたとしても聖戦時代　もう百年近く前の話だ」

「やれんのか？　今のお前と、タラスクスに」

「向こうは今起きたばかりの寝ぼけ爺。必ず隙はある」

「寝起きの悪い暴れん坊將軍だったら、ハマるぜ？」

「機嫌が悪いのは私も同じ。　で、どこ」

この身なりのわりに偉そうな男は香禽司《かとりつかさ》。自称トレジャーハンター。実際は泥棒とか墓荒らしとか詐欺師とかで生計を立ててる、つまりは人間のクズ。

この物語はそのクズと私がどうしてつるんでのか　なんてつまらない話じゃないので、安心してください。それはあくまでついでです。

で、私の問いにそいつ　香禽司は笑って答えた。

「喜べ。海だ」

十

誰が喜ぶか。騎士ナメんなよ。

「とか言つて。本当は期待してたんだろ？」

「しないわよ」

「じゃあその水着は何なんだ？　わざわざ服の下に着てくる意味は？」

「…き、気分よ気分」

「家から水着を着てくるのは禁止だって習わなかったか？」

「誰に」

なんて展開を一瞬でも期待した人、お生憎様。広大な聖ドレイク連合王国の中心にある聖王親政府から海が見えるこの町までは片道およそ九百キロ。馬車と鉄道を乗り継いで全速力でここまで来ましたが、すでに辺りは真っ暗です。磯臭くてゴミの多い砂浜にも、今

は人っ子一人いません。

もう終電も出てしまったので、このクソ寂れた田舎町で一泊決定です。「しかも、こんな人間のクズと」

「ご挨拶だな。俺を挑発してどうする気だ？」

「もし問題起こしたら、警察が来る前に私が手討ちにするからね」

「その時お前が生きてれば、だろ？」

「…」

それには答えず、途中で買ったイカ焼きを齧る。「で、奴はどこ」

「あそこだ」

「あそこ？」

司が指差したのは何も無い海のと真ん中。仕方が無いので目を凝らすと、暗闇の向こうに小さい島みたいのが見える。「見た目は何にも無い無人島だが、その実は地下七層にも及ぶ奴のためだけの要塞島だ。当然罠もあるだろうが、G A I ―《地对空迎撃システム》なんぞに今更引つかかるお前とタラスクスじゃねえだろ。今までの恨みもあることだし、島ごと潰すぐらいの気持ちで行った方がいいかもな。その方が向こうも慌てるぜ」

「あれが奴の本拠地なの？ マジで？」

「島まで乗り込んで奴が出てこなかったら、擬装カタパルトがあるらしいからそれをぶっ壊して殴りこめ」

「待った。それは誰が調べたの？ あんたが見てきてくれたわけじゃないでしょ？」

「要は、あそこに別荘を建てようとして、それを見つけて起動しちまったバカがいたんだよ」

「誰」

「ノーコメント」

「は？」

「守秘義務があるのでノーコメント」

「…もついい」

イカ焼きを食べ終わり、串を司に渡す。「なあ、これオークシヨ

ンに出していいか?」「即手討ち」

「相場を聞いたらきつと考えが変わるぜ?」

「即手討ち」

立ち上がり、お尻についた砂を払う。「で、あの島へはどうやって?」

「知らん」

「は?」

「無人島だつったろ? 船なんか出てねえよ」

「…チャーターするとかしなかったわけ」

「戦闘になる島にか? お前が俺だつたらするか?」

「…泳いでいく…には遠いよねえ…」

「ゴムボートでも買って自分で漕ぐか どちらにしても体力の浪費だよなあ」

投げやりに言うと、司は串をポケットに仕舞って立ち上がる。

おい、仕舞うなよ。ちゃんと捨てるよ。「じゃ、俺は先に宿取つとくぜ。事が済んだ頃に顔出さあ」言つてさっさと歩き出す。

「…」

それを見送り、私は一つため息を吐く。「…はあ」振り返り、島との距離を顧みて、またため息。

「…そりゃ、今さら引つかからないけどさ」

一応周囲に人がいないのを確認し、私は胸のボタンを二つ開け、中からペンダントを取り出した。

十

私の永い永い復讐劇の白熱の終章を御覧頂く前に、ちょっとだけ私の昔話にお付き合いください。

物心ついて間も無い頃、私の世界にはまだ『色』が無かった。

空はいつもどんよりと曇り、塞の十階にあった私とママの部屋

から見渡す地平は果てしなく濁った土気色で、それを埋め尽くすように鈍色の瓦礫が散乱していた。私もママも塞の人達も、皆破れて薄汚れた粗末な衣服しか着られなかった。

一度、ママに質問したことがある。「ねえ、ママ」

「どうして、お空はいつも曇ってるの？」

「人間のせいよ」

人間？

「にんげんって 誰のこと？」

「皆よ」

「みんな？」

「そう。 ああ、朝はまだ生まれたばかりだから、違うけどね」

「みんなって、ママも？ とりでの人達も？」

「そう。 皆が我侭だから、神様が怒って太陽を隠してしまったの」

納得のいかない説明だった。

私が知ってる塞の人達は、皆優しくておおらかで、何よりも自然を愛していた。塞の外からやってきたママと私にも分け隔てなく接してくれた。こんなに優しい人達に、何を腹の立てることがあるんだろうと思った。

まあ、それはいい。それはよかった。私には正直どっちでもよかった。世界が灰色だろうと何色だろうと、ママがいれば私は幸せだし、塞と皆がいれば生きていくことはできる。

ただ、退屈だった。

幸せで平和だったけど、『色』の無い世界というのは、酷く退屈だった。

「ママ」

「何？」

「神様って、本当にいるの？」

「……いないわよ」

「でも、さっき」

「いないの。だから、自分自身が強くななくちゃいけないの。特にこんな時代ではね」

「…うん」

「…でも」

「でも？」

「そう言っていた人達が、世界をここまで破壊したんだとしたらその考え方は、間違っていたのかもしれない」

「…」

親バカ、という言葉はあるが、娘バカ、という言葉は無い。

残念だ。

私には、静かにそう呟いたママこそが、神様に見えた。

ある日、小さな花を見つけた。

私にはその日突然現れたように見えたけど、本当はもうずっと前から、そこで咲いていたのかも知れない。小さくて黄色い花。

『色』に飢えていた私はその花にひどく執着して、わざわざ周囲のコンクリートを食事用のナイフとフォークで削り落とし、根を傷つけないように丁寧に掘り出し、塞のリーダーに頼んで要らないコップを一つ分けてもらい、その子を自分の部屋に連れ帰った。

世話はまめにやった。まあもともと生命力の強い花らしいから、多少さぼってもよかったのかもしれないけど。

でも一つ妙だったのは、口うるさいママも厳しいリーダーもそれ以外の人達も、私がそこまでしてその子に執着するのに、不思議と何も言わなかったことだ。

皆も、『色』に飢えていたのかも知れない。

終わりは、真夜中にやって来た。「朝」

「朝、起きて。支度しなさい」

「…ママ……？ おはよう」

「おはようはいいから。早く着替えて」

「どうしたの…?」

「いいから、早く」

「夕、まだか」

外から声がする。塞の仲間だ。「もうちょっと待って。着替えさせるから」

「裸で寝てるわけじゃあるまい」

「着替えさせるの」

「親バカだな。急げ。余計な荷物は持つな」

「もともと無いわ」

…荷物? 「ママ」

「ママ、これは?」

コップに植わっている花を差し出す。「朝、いいから着替えなさい」

「ママ、この子も一緒」

「わかったから」

轟音。

状況のわからないその時はまだ、恐怖は沸いてこなかった。ただ突然耳が聞こえなくなつて、突然自分が床に転んだだけ。

最初に気づいたのは、あれほど大事にしていた花を、床にぶちまけてしまったことだった。

「ご、ごめん!」

花に謝りながら駆け寄り、土を集めてコップに戻し、そこに丁寧に花を植え直す。

作業を終えて一息吐き、振り返る。「ママ」

ママは、潰れていた。

崩れた瓦礫の下から、ママの足だけが覗いていた。

「」

後悔した。

本当に、ほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにほんとに死ぬほど死ぬほど死ぬ

ほど死ぬほど死ぬほど死ぬほど死ぬほど死ぬほど死ぬほど死ぬほど後悔した。

あれほど好きだったママよりも、たかが花の方を心配した。
あれほど好きだったママよりも、花を助ける方を優先した。

あれほど好きだったママが、この世でたった一人しかいないママが、すぐ後ろで死んでいるのにも気がつかなかった。

私は、最低だ。全人類の中でも最低最悪のクズ野郎だ。毀れて
いる。

「！」

私は駆け出した。何か叫んでいたのは憶えているが、何を叫んだのかは憶えていない。多分ママが死んだことが、あるいは私は最低だとしても叫んでいたのかもしれない。

部屋の入り口にはやはり瓦礫が散乱し、その下から真つ赤な血が滲み出していた。「……！」さっきの仲間のものだろう。赤い色彩が、広がっていく。

私は半狂乱で走った。走るうち、私は塞の中が、私の知らない色と温度で満たされていることに気づいた。松明よりもずっと明るく、赤やオレンジに姿を変える炎。その温度は釜戸よりもずっと熱く、遠くにいても身体を焼いた。

どうして急に、こうなっただろう。

私が求めた『色』は、こんなにも激しく、非情なものだったんだろうか？

二度目の轟音。「きゃ！」またしても私は転ぶ。

気がつくと、私は一階まで降りてきていた。もとは大きなホテルだったらしい塞の広いロビー。

起き上がった私の目の前に、そいつは聳え立っていた。超A級のそいつは量産機の連中とは違う、目にも鮮やかな『色』がカラーリングされていた。首と肩、背に生えた翼は緑色。身体は赤。当代最高位の竜鱗装甲が施された身体は炎の中で艶めき、まるで自ら光り輝いてるようだった。右手には180口径のワンハンド・ライフ

ル。左手には対装甲ブーステッド・サーベル。

その闇色の双眸が、私を捉えた。「……！」巨大な化け物が、腰を折り、私を覗き込んでくる。

生まれて初めて、生死に関わるほどの恐怖を感じた。

そして、理解した。

『色』が無かった私の世界に、突如としてこれだけの色を持ち込んだ化け物。どうして私の世界には『色』が無かったのか。どうしていつも私の空は曇っていたのか。どうしていつも十階から見渡す私の世界は荒れ果てていたのか。どうして私もママも塞の人達も、皆乞食みたいな粗末な服しか着られなかったのか。どうして私はあんな小さな花に執着したのか。どうしてママが死んだことにもっと早く気がつけなかったのか。そもそもどうしてママが死んだのか。

全部こいつのせいだ。

ママや塞の人達が神様を怒らせて天罰を受けたなんて、とてもじゃないが信じられない。どう考えても今まさに私の世界をぶち壊そうとしているこの化け物のせいだ。こいつさえいなければ私の世界はもっと色彩に満ち溢れていたはずだった。こいつさえいなければ空はもっと澄み渡り、いろんな色を私に見せてくれたはずなのだ。こいつさえいなければ大地には草木が生い茂り、花だって匂いが立ち上るほど咲き乱れていたはずなのだ。こいつさえいなければ私もママも塞の皆ももっとお洒落な格好をして、毎日服を代える事だってできたはずなのだ。こいつさえいなければ私はあんな花に執着せずともよかったのだ。こいつさえいなければ私はもっと早くママの危機に気づけたはずなのだ。こいつさえいなければ、そもそもママは死なずに済んだのだ！

こいつさえ　こいつさえいなければ！

「あんたさえいなければ！」

叫んだ。

力の限りに叫んで、私はそいつに　いいやそいつだけじゃない。そいつと同類の全てのクソ野郎に宣戦を布告した。

全ての竜を 滅ぼす。

十

G A I は、結局作動しなかった。

タラスクスに乗り込んだ私は両脚のメインバーニアを吹かし、島まで一息に跳躍した。両脚。そう。このタラスクスというひねくれ竜機兵は、よりによって両脚なんかにメインバーニアが設えられている。普通は背中とかについてるものなんだけど、これだと飛んだり跳ねたりする時に姿勢制御が目茶目茶難しい。一応 A C M C S 一《空戦機動制御補助システム》とかもあるのだけれど、このタラスクスでまともな空中機動ができるのは今のところ私だけだし、これからもきつとそうだろう。

島に降り立ち、周囲を見回す。一面木々に覆われているが、その緑色の海はタラスクスのせいぜい胸までしかない。

この要塞が生きているなら、もうとくに私が来たことに気づいているはずだ。海岸からここまで、決して近くは無い。迎撃はいくらでもできたし、カタパルトとかがあるならさっさと出てくればよかったのだ。今から発進シークエンスをやっていたら、私とタラスクスなら三回先手を取れる。

それなのに、出てこない。

「……」

つまり、奇襲。あいつの好きな手だ。

思い出してレーダーを見る。何も映らない。静かな砂嵐。

「……やっぱり」これで奴の狙いははっきりした。パワーの無駄なのもうレーダーは切る。

……もう、居るかも知れない。「……」

肉弾戦じゃないんだから、コクピットの中で私が神経を研ぎ澄ませたところで、外の気配など感じることはできない。しかし、タ

タラスクスは頭部に二つのメインカメラと、全身全方位に八つのサブカメラを持っている。周囲の状況は全て私の目の前のメインモニターとAGMC―《全方位統合モニター群》に投影され、私は本気の騎士の太刀筋ですら見切つて止める眼でそれを監視している。敵がたとえ背後から出てきても決して見逃さない。馬鹿にしないでよ。これでも一度は、ヤノシュ卿の打ち込みだつて止めたことがあるんだから。

指先一つも動かさずに三十秒待ったが、敵は出てこなかった。「…」海風が吹き、タラスクスを揺らす。

『もつとこつちへおいで。腰抜けのお嬢ちゃん』
「…上等」

まだ近寄れというのか。ここまで踏み込まれてもなお、まだ敵を引きつけようというのか。それとも、私の度胸を試しているのか。

タラスクスが背中中のウェポン・ラックから弓を引き抜く。タラスクスは二脚四腕の竜機兵で、背には六基のウェポン・ラックがあり、それぞれ刀、槍、斧、短剣、弓矢が装備されている。最下部の五番が弓、同じく最下部の六番が矢筒だ。この武装だけを見てもらっても、このタラスクスという竜機兵のひねくれ加減がわかってもらえると思う。偏っているのだ。せつかく六つも武器を装備できるというのに、銃とかビーム兵器とか、そういう近代兵器が一つも無い。弓矢以外はまるで本当の中世時代のような原始的な格闘武器ばかり。もちろん弓矢も十分に原始的だけど、いや、中世の騎士よりもまだタチが悪い。だって盾すらも無いのだから。

四つの腕と背中に六つの武器を持ち、足から火を吹いて空を飛ぶ異形の魔竜、タラスクス。それが戦場で戦う姿は、見る者に勇気ではなく恐怖を与えたはずだ。百年経った今でこそ私とタラスクスは英雄扱いされているが、実際の百年前の聖戦では、必ずしもそうではなかった。

人間の技術が竜に追いついて、私以外の人間が竜を竜機兵とし

て乗りこなすようになって、このひねくれ者のタラスクスだけは私以外の乗り手が現れなかった。私には新型機の話があったんだけど、断ってこのひねくれ者に乗り続けた。理由は二つ。一つは、どんなにひねくれ者で人から忌み嫌われる魔竜でも、こんな私と一緒にあの地獄を歩いてくれた、かけがえの無い相棒だから。

もう一つは 百年経った今でも、性能に不満を感じないから。六番の矢筒から矢を引き抜き、弦に番える。自分の背丈ほどもある長弓を、タラスクスは第一左腕と第二左腕で構え、矢を番える第一右腕をさらに第二右腕で支える。四つの腕をフルに使い、通常の倍の力で矢を放つ。弓を引く力が倍になれば、威力も射程も倍以上になる。敵がどこまで逃げようと逃がさず、どんなに堅い装甲でも砕き、貫く。問題はそんな力に弓が耐えられるかどうかだが、タラスクスの弓はそのため造られた特注品だ。

番える矢は大型広域焼夷鏃。矢が一定の速度に達すると鏃が内包した気化燃料を周囲に撒き散らし、命中すると炸薬に点火、周囲に大爆発を起こし、火の海にする。鏃に込めてある燃料は実はそれほど多くは無いので、本当は中距離以上遠距離未満で使うのが望ましい。

まさに、今この状況で使うのがうってつけ。「行くよ 止めてみな」

呟き、タラスクスに弦を引かせる。驚異的な臂力に長弓が大きく撓り、楕円形になる。狙いを定める。タラスクスが爆発に巻き込まれず、なおかつ島ごと炎に包んでしまえる絶妙な距離を測る。

奴は、まだ出てこない。「止めないの？」

「自分の家を焼かれるのは あんたが思ってるよりずっと、哀しいんだよ」

放つ。

轟音と共に地面が弾け、視界が赤とオレンジに染まる。

タラスクスの胸まであった森は一瞬で消え去り、天高く吹き上がる炎が世界を覆う。灼熱の世界。封じていた記憶が蘇る。百年前

に過ぎ去った地獄。頭は忘れても、心と身体に染み付き刻まれた灼熱の温度。十歳の私から全てを奪い取り、怒りと憎しみだけを残していった色。「…家を焼かれるのは」

「あんたが思ってるよりずっと、哀しいことなんだよ」

「そうかも知れんな」

「!？」

赤に染まったメインモニタ。その下の三つのサブモニタも、二つまでは同じように炎で赤く染まっている。

中央のサブモニタ　タラスクスの背後を映すそれだけが、黒い。本当は　あいつなら黒くはないはずだが、炎の逆光を受けて、今は黒い。死と凶事を連れて来る禍者のように。「確かにこれは、大打撃だ」

「私にとっても、自分の整備施設と必要な物資を格納した攻性拠点を失うというのは、決して小さくない戦略的損害だ。しかもそれが敵の攻撃によるものだとなれば、さらにその緊急性・危険性は高くなる。その点では、私と君が感じているものは同じだろう。しかし、おそらく君はそれ以上のものを感じている。私は自分の受けた損害を数値化し、考量することはできるが、君が今言った哀しみを感じることはできないだろう。その郷愁は、おそらく人間にしか　いや、人間の中でも、君のような純粋な者にしか分らないものだ。私に分かるのは、それが極めて希少価値の高いものであるということぐらいだ」

「…そこまで分かっている割には、出てくるのが遅かったね」

「私に挑んでくる人間など久しぶりでね。しかも何の恐れも無く私のアジトに乗り込んできた。少し見ていたかったのさ」

「不愉快ね」

「何がだ？　聞こう。君が恐怖を押し殺し、敢えて私に戦いを挑むその理由を聞こうじゃないか」

「自分で言ってる気がつかない？」

「何？」

振り返る。右第一腕で一番から刀を引き抜き、なぎ払う。ケツアルコアトルは後ろに身を反らしてかわし、逆にこちらへ踏み込んでくる。腰だめに構えたブーステッド・サーベルの切っ先が、私をつまりはタラスクスの眼がある頭部を狙う。ブーステッド・サーベルは箆手と一体になった武器で、箆手には三基の炸薬式噴射口がある。攻撃と同時にブースタに点火し、敵の予測を超える速度の衝突を繰り出す。回避を入力した瞬間にはすでに攻撃を受けている。敵が踏み込んでくるのは見えても、そこから先は見えない。切っ先の狙いが正確なら、まさに一撃必殺となりうる。

なので、私もブースタに点火した。「!？」

衝撃。私は一瞬前に全身に力を込め、歯を食いしほる。タラスクスが明後日の方向へ飛ぶのを感じながら、モニタに浮かぶ警告を確認する。細かい警告メッセージはあるが、決定的な損害を受けたというものは無い。唇が笑みに歪む。思った通りだ。タラスクスは脚にブースタを持つ。それを瞬間的に全力噴射すると、私ですら予測不能な機動ができる。ましてケツアルコアトルは背中に翼を持つごく平均的なデザインの竜機兵。こんなひねくれたレイアウトの竜と戦うのも初めてなら、こんなアホな方法で自分の攻撃に反応する相手も初めてだろう。

A M Cを起動し、全部のモニタを確認して、「殺った！」喝采を上げた。タラスクスは空中。直上に飛び上がったのだ。そして衝撃はあったが、それは私が思ったより大きくなかったらしい。ケツアルコアトルはサーベルを振り抜いた姿勢で、タラスクスの真下にいる。まだこっちの位置に気づいていない。

私はA M Cから機動制御を奪い取り、タラスクスを空中で逆立ちさせる。四番から短剣を引き抜き、刀を持つ右第一腕以外の三つの腕で真下に構える。ここは槍でもよかったが、それだとコンマ一秒構えるのが遅れる。その間にもタラスクスは落下し、折角の位置エネルギーが失われ、インパクトの瞬間の破壊力が減退する。

全力噴射。

再び衝撃。

今度は先ほどの比ではなかった。力を込めていたはずが身体が大きく前後左右に揺さぶられ、コンソールに頭をぶつけ、余計なことを喋っていたせいで思いつきり舌を噛んだ。けたたましく警告音が鳴り響き、それを大地が割れる轟音がかき消していく。

もしかしたら、何秒か気絶していたかもしれない。私はコンソールから頭を起こし、モニタを確認する。何も映っていない。

「ああ、埋まってるから」

タラスクスを起き上がらせる。周囲にはまだ火の手が上がり、真夜中のの海を煌々と照らす。炎の熱と光が、傷つき老いさばらえ、痩せ細った心を照らす。

この非情の光だけが、私を百年前の、血塗れの青春に引き戻してくれる。

「……いないな」

呟く。敵の姿は無い。重力と速度を味方につけたタラスクスに押し潰され、大地と共に砕け散ったのだろうか。いや、油断はしない。百余年に渡ったママの復讐が、この程度で終わるわけは無い。逃げたか、隠れたか。

呼吸を整え、静かに待つ。右第一腕に刀、左第一腕に短剣。

完全に呼吸が整うまで待ったが、出てこない。

「……ふっ」

私でさえ目視できない速度で飛び込んだので断言はできないが、タイミングと位置関係から考えて、完全に回避されたとは思えない。直撃か、辛うじて反応されたとしても何かしら損害を与えたはずだ。その上で出てこないということは、逃げた可能性がある。拠点を破壊され、自分も損害を負い、ここに留まる理由が無くなったのだ。すごく合理的な決断だ。人間ではあり得ないほどの引き際の良さと言える。これだけの時間で撤退の決断を下せる指揮官は、人間ではまずいないだろう。プライドも何も無いから、そんな逃げ方が平気のできる。人間のことを何とも思っていないから、戦術的勝利などく

れてやると言える。

だから、あの戦争も結局、人間の勝利で終わった。「ふふふ……」
「……追い詰めてやる。何度でも追い詰めて、何度でも殺しに行つてやる。識らないのなら識るがいい。力を持った者が自分を殺しに来ることの、本当の恐怖を識るがいい。戦うことが好きなどと、挑まれることが光栄などと、今後二度と口が裂けても言えないようにしてやる」

「お断りする」

「!？」

リーダーはさつき自分で切った。仮に点けていても、敵のジャミングで役には立たなかっただろう。だから、すぐ傍に敵がいたとしても、警報なんて鳴らない。

声は、真上から響いた。

「私は戦うのが大好きだ。何故かって？ 私はそのためにこの世界に造られたのだ。この翼を以って空を飛び、この眼を以って敵を探り出し、この脚を以って敵を追い詰め、この銃と剣を以って敵を打ち倒すことに私の存在意義があるのだ。それ以上に重要なことなど、どの角度から検算しても私には存在しない。私は戦いが大好きだ。戦いこそが我が総てだ。」

ところで、チェックだ。少しでも機体を動かせば、この180口径のワンハンド・ライフルが君を頭から撃ち抜くぞ」

「やれば？」

「まだだ。まだ君の理由を聞いていない」

「何の理由？」

「だから、戦う理由だ。私に何か恨みでもあるなら、今夜は気分がいいから聞いてあげようじゃないか」

「まずそこが間違ってる」

「何？」

「私はあんたと戦いに来たわけじゃない」

タラスクスの首を上に向ける。なるほど確かに黒い銃口が、モニ

夕越しに私を狙っている。

「あんたがさつきから言ってる、戦うとか挑むっていうのは、対等の相手に対して使う言葉でしょ。私はあんたと戦いに来たわけじゃない。あんたは人を殺しすぎた。人間の常識じゃ考えられないほど人を殺した。」

もう人間の中には、あんたと対等な立場で戦おうと思う人間は一人もいない。あんたには死を与える。私はあんたを処刑する」

しばらく、沈黙があつた。「……ふふふ」

哄笑。

禽のようにけたたましく、人のように悪意に満ちた嗤い声を上げ、ケツアルコアトルは空高く飛び上がった。タラスクスが跳ね、それまでいた地面が爆ぜる。最初の銃撃をかわせたのは、ただカンが当たったからに過ぎない。いつそそのまま引き金を引かれたほうが反応のしようがあつただろう。哄笑と急上昇という一見無意味な機動を挟んで、私の意表を突いてきた。

超高空からの銃撃はさらに続いた。タラスクスはその度に跳ね、どこから来るかわからない銃弾をかわす。発射点も着弾するタイミングも不規則に変わり、狂ったような銃撃が襲い掛かる。レーダーが使えない以上、私には超高空を舞う敵の姿は見えない。しかし、敵の竜の瞳には遥か下方の私のはっきりと見えているのだろう。不規則に撃ちまくっているようでいて、最も私が反応しにくいタイミングで弾が降ってくる。翼を持たない私とタラスクスには、ただ逃げ回ることしかできない。

「さあ！ やつてみたまえ！ レーダーを使えない今の君に、私の全力攻撃がかわせるか！？ 処刑などという言葉は、絶対的な力を持つ者のみに許される言葉だ！

君はそうではない！」

「……」

何か言い返そうと思ったが、余裕が無かったので止めた。

必死に敵の裏をかき、敵が予測しない位置へ回避するが、やは

り限界はある。かすめた銃弾がタラスクスの装甲を剥ぎ取り、装甲と大地の破片が飛び散り、視界を私から奪っていく。

まだだ。まだ倒れるわけにはいかない。

跳躍の振動がコクピットまで伝わり、私の身体をいよいよに弄ぶ。地面が砕ける轟音が耳を劈き、心臓まで突き刺さる。閉ざされる視界が私に絶望を突きつける。汗で衣服が身体にへばりつくのを感じる。しかし汗をかいているのは、もちろん熱いからではない。身体の芯は恐怖で冷え切り、胃と心臓が緊張できりきりと痛み、精神が限界を訴え悲鳴を上げる。

終に直撃弾が、タラスクスの右肩を吹き飛ばした。倒れこみ、機体が衝撃で地面を滑る。

「ここで全弾を叩き込む！」

「まだよ！」

叫び、タラスクスを振り返らせた。天を仰ぐ。降り注ぐ無数の銃弾。破壊された右第二腕をパージし、残りの三腕に刀、短剣、斧を構え、ある弾は弾き、ある弾は最小限の動きで回避する。ここが勝負所だ。敵ももう何十発と撃ったか知れない。必殺必中のはずの銃撃を悉く退ける私とタラスクスに、私以上に焦れている。そこへやっとな直撃弾。ここで勝負を着けなくなるのも分かる。というか、まともな考え方の戦士なら、ここを逃したら永遠に勝負が着かないか、下手したら負ける。というぐらいのことには思い至るはずだ。よって、敵がここで一斉射撃で勝負に出たのは当然であり予定通りだ。その判断は正しい。そして私は都合よく足を止めた。まさに敵にとっては千載一遇の好機。タラスクスの振る三つの腕よりも早く連射できる銃があれば、ここで私を倒せる。

そして、そんな銃は、この世には存在しない。

敵の銃は一丁。タラスクスの腕は三つ。手数で負けることは絶対にあり得ない。後は私の目と腕が、敵の銃撃に完全に反応してタラスクスの腕を使役できるかどうかだが

私には、私の眼がある。四万日以上の日々を戦場で過ごし、血

と涙と恐怖と引き換えに研ぎ澄ました、どんな竜にも負けない戦眼がある。

「勝ったよ、ママ　！」

時間になると数秒も無いほどの攻防が終わる。最後の弾を右手の刀で思いきり斬り飛ばしたのが、私の反撃の予備動作だ。その勢いを殺さずにタラスクスは一回転し、左第二腕に構えた斧を敵に投げつけた。

「何！？」

「バカめ！」

敵のそれはもはや敗北宣言であり、私のそれはもはや勝利の喝采だった。ケツアルコアトルはあろうことが、私に銃撃しながら高速で降下していたのだ。きつとここで全弾を使い切ったから、一斉射撃を凌ぎきって油断した私に止めを刺そうと思ったんだろう。判断ミスだ。私の反撃を想定していなかったらしい。この高速戦闘中にそこまで考えられるか　　というのは負け犬の言い訳だ。戦士に最も必要なのは体力ではない。敵の動きを見切る眼と、それに対して瞬間的に戦術を立案する頭だ。私みたいに竜機兵に乗って戦う奴は特にそう。それが出来ないバカから順に、戦場では死んでいく。

敵は結構な高速でタラスクスに向かって突っ込んできていた。咄嗟に回避しようとしたようだが、その速度とベクトルまでは咄嗟には殺せなかったらしい。

竜が悲鳴を上げる。十分すぎる質量と速度を持った斧が、至近距離からケツアルコアトルの肩口に食らいついた。敵もこちらに向かって飛んでいたので、相対速度は倍以上あったに違いない。斧はびっくりするほど易々とケツアルコアトルの右肩を破壊し、銃を持ったままの敵の右腕が宙を舞い、敵の肩を貫通した斧はそのまま後部の右主翼に突き刺さり、爆発させた。低空飛行していたケツアルコアトルはその衝撃で錐揉み状態で私の右側を通り過ぎ、土埃を上げながら地面に叩きつけられる。

私はタラスクスを振り返らせ、短剣を持つ左腕を前に、刀を持

つ右腕を引き手大上段に構え、ケツアルコアトルに踊りかかった。もう小細工は要らない。フルスイングで斬り捨てる。敵が土埃を巻き上げ、超高速で体勢を立て直そうとする。しかし、遅い。いや、フルコンディションのタラスクスが相手なら十分速いかもしれないが、今のタラスクスにとっては、遅すぎる。

今のタラスクスは、斧と右第二腕と右肩装甲を失っている。最初に相対した時より、ずっと軽く、速いのだ。

そして、今から振り下ろすこの一太刀も、先程の一撃よりもずっと速い。

昔のデータからしか回避動作を構築できない機械の竜では、この一太刀はかわせない！

重く激しい金属音が、燃える夜の島に響き渡った。

「ぐ……！」

「ふ、ふふふ……」

私の太刀は、ケツアルコアトルを一刀両断にすることは出来なかった。ぎりぎりで体勢を立て直したケツアルコアトルが、逆手に構えたサーベルで私の刀を食い止めたのだ。

しかし、完全には防げていない。

ケツアルコアトルのぎりぎりは、本当にギリギリだった。サーベルは確かに私の刀と打ち合い、その威力を大きく減じることになったが、それも完全ではなかった。私の刀はケツアルコアトルの腹部に食い込み、しかもまだ敵のサーベルと競り合っている。

「う、うう……！」

「ふ、ふふ……ふふふふふうううふふふふふふふふふううふっふ」

私は笑った。笑っていたに違いない。

私は操縦桿を動かし、左第二腕を刀に添えた。こういう時腕が多いと便利だ。対する敵の腕は一本のみ。こちらは大型の刀。敵は細身のサーベル。

押し斬れる。

二本の腕で、徐々に力を込めていく。ケツアルコアトルも耐えるが、少しづつ刃は食い込んでいく。強大な臂力で迫ってくる刃に、サーベルなどいつ折れるか分からない。力を込めすぎても折れるし、かといって力を抜くわけにもいかない。タラスクスの腕に、敵の腹に刃が食い込む感触が伝わってくる。金属質のそれは振動となつてタラスクスを揺らし、私がいるコクピットまで伝わってくる。それは操縦桿を揺らし、私の腕にも伝わってくる。

仇の腹を切る感触が、私の腕に伝わってくる。

左腕の短剣を振り上げ、ケツアルコアトルの右胸に投げつけた。

「ぐあー！」

衝撃にケツアルコアトルが大きく揺らぎ、刀身がその腹部に半ばまで埋まる。タラスクスはさらに空いた左腕を刀に添え、力を込める。刀身がさらに深く食い込み、ケツアルコアトルの腹部を半ばまで斬り裂く。「私のママは！」

「私のママは、あんたに殺された！ あの時塞にいた仲間も！ あんたらのせいで何にも無かったあの頃の私には、ママと皆しかいなかった！ それすらもお前は殺した！ 何の理由も無く！ 私から本当に全てを奪っていった！」

「そ、それが 君の――」

「あんたを殺してやる！ あんただけじゃない、竜と名のつくやつは私が皆殺しにしてやる！ それまで私は戦争を止めない！ 止めてやるものか！ 止めて欲しけりやママを返せ！ あんたを殺して、私は人生をやり直す！ あんたらのせいで何にも無かった青春を、この時代でもう一度やり直す！」

何もかもあんた達のせいだ！ これまで一体何人殺した！？ ご大層な電子頭脳のくせにどうせそこは数えてないんだろ！？ あんたが人間に流させた血と涙を、同じ苦痛と汚辱に塗れた敗北で贖え！

あんたさえ あんた達さえいなければ！」

「本当にそうかな？」

「！？」

ただ、敵の叫びがタラスクスを揺るがすのを、装甲越しに感じるだけだ。「見事だ！」

「私に『砲』を使わせたのは君が初めてだ！ 我が砲は神託の声！ 我が敵に滅びの予言を下し、粉々に打ち砕く超指向性音波砲！ 君から受けたダメージが無ければ、あと数秒照射を続けて君を破壊するところだったが！」

という言葉も、その時の私には聞こえていなかった。私の耳が血を噴いたのと、敵の攻撃を凌ぐので頭が一杯で、何も考えられなかった。

「そら、もうリングアウトだよ！？」

「！？」

直撃を受けたわけでもタラスクスがバランスを崩す。後方サブモニタを見ると、攻撃を受けるうちに追い詰められて、狭い島の端まで来ていた。背後にはもう崖しかない。しかももう片足を踏み外している。

「そら！」

「！」

ケツアルコアトルのサーベルが飛ぶ。避けて落ちるか、踏み止まって直撃を受けるか

無意識に、前者を選んだ。「ありがとう！」

「本当に見事だ！ まさか戦争の終わったこの時代に、これほどの好敵手と見えられるとは思わなかった！ 私はこれより新たな拠点を求め、そこで君のために傷を癒し、君のために新たな戦闘コミュニケーションを構築し、君のために精進に励もう！ ぜひ再戦を挑んでくれたまえ！ 君が来ないなら私が行こう！ 私はケツアルコアトル！ 型式番号DFX 999 3永級汎用竜機兵！ また会おう！ ありがとう！ 本当にありがとう！

君の名乗りを聞けないのが残念だ！」

「！！！」

海に落ちるタラスクスの中で、私は半狂乱でメインモニタを殴り

つけた。殴り、殴り、殴り、蹴りつけた。竜機兵乗り失格だ。敵が憎いなら操縦桿を握らなければならない。敵を倒したいならモニタは殴るのではなく見なければならぬ。

そんなことも忘れるほどに、怒り狂っていた。

「畜生！ 畜生畜生畜生畜生畜生畜生！」

タラスクスが沈んでいく。視界が黒い水に閉ざされていく。

さつさとバーニアで飛べばいいとか、そんなことすら忘れていた。

十

もうどのくらい沈んだのか分からない。

上も下も無くなったようなコクピットに、計器の間からちよろちよろと水が染み出している。水は放心した私の足元に水溜りを作り、徐々に大きくなり、もう私の踝まで濡らしている。

どこかでべこんべこんというマズそうな音が聞こえるが、何もする気が起きない。「…なんで」

「なんで邪魔したの…？」

「邪魔をしたわけではない。問いかけたのだ」

「それが邪魔なの……何も、今じゃなくてもいいじゃない。よりにもよって今日の今この時に問いかけてくださなくてもいいじゃない。他の時に邪魔するのだったら、百歩譲って許せるよ。でも、今日という今日は、今日のこの時ただ一回だけは、黙って見てくれてもいいじゃない」

「別に、今日のこの時この瞬間を狙って問いかけたわけではない。私はいつだって君に問いかけていた。君の戦いは正しいのかと。君の命を懸けるに値するものなのかと」

「何度も言っただでしょ　それは、私が決めること。あんたじゃない」

「いや、違う。君はまだ決めていない。その証拠も私は持っている」

「出鱈目を」

「なら君は、何故あの時刃を止めたのだ？ 私は常に君に問いかけていた。それこそ君が会議中でも、移動中でも、戦闘中でもだ。しかし戦闘中は、君は集中しすぎて聞こえていなかったようだ。しかし、あの瞬間君は私の声に気づき、それによって刃を止め、結果あの竜の命を見逃した。本当に迷いを棄てたのなら、私の声を無視して刃を振り抜けばよかったのだ」

「論点をずらすな。私は、あんたが、なんで邪魔したのかって訊いてるの」

「君にもつとよく考えて欲しかったからさ。君はいま本当に幸せなのか？ 確かに、第二の人生をやり直すという君の考えには賛成だ。君はよく頑張った。常人ならとくに退役するところを、延命処置まで受けて戦場に立ち続けたのだから、おそらくこの地上に、君より長い時間戦場で戦った人間はいないだろう。間違いなく君が一番だ。そろそろ足を洗って静かな余生を送りたいと思っても、誰も文句は言わないだろう。」

しかしそれは、全ての竜を滅ぼした後でなければダメなのか

？」

「…あいつらを、庇うの？」

「私は誰も庇わないし、誰も責めない。私が責めるとすればそれは、自ら幸せになることを放棄している人間だけだ」

「…あんたに何が分かる」

「わかるとも。私は君の全てを見ていたし、君の心の慟哭も全て聞いた。だからこそ、私は君に幸せになつて欲しいのだ。今すぐに」

「…」

「それとも君は、戦うことが好きなのか？ あの竜にあれほど、殺し合うことの恐怖と無惨を説いた君が？」

「…」

「それとも、君は まだ自分を偽っているのか？」

「…」

私はため息を吐き、シートに頭を預けた。「寝る」

「おいおい。寝てる場合なのか？」

「黙って」

「そろそろ浮上しないと、深度がマズいことになると思うんだが？」

「うるさい」

「まさか君は、ここで死を選ぶつもりか？ もしそうなら私は、君を決して許さないぞ。私は自殺する人間が嫌いだ。自ら幸せになることを放棄し、死ねば楽になれるなどと考えるのでは、私が君たちに命を与えた意味が無くなる。君は自分のやっていることを全否定される辛さを知っているのか？」

「黙れ」

十

「あんたは、神様っていると思う？」

「いたら俺はこんな仕事してねえよ」

過去に、ある不良とそんな会話をしたことがある。

…もし、彼の言ったことが正しいとしたら。

私は 毀れている。

？ ・もしあなたが「あと一步なのにうまくいかない」と感じたら（後書き）

というわけで第一話です。

主人公の朝が悩んだり、戦ったり、恋したりしながらやり忘れた青春を探す物語です。

感想等ありましたらお寄せください。

次回は騎士の一人、黒衣の魔導師レギンが登場です。

ご期待ください というかもうやってます。ご検索ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8773p/>

タラスクス～朝の病名～？

2011年1月9日01時24分発行